

〔また出た中国の改竄写真〕

今度は「七三一」関係 生体実験の「マルタ」と思いきや 実は済南で虐殺された日本人

昭和史研究所代表

中村 燦

偽皇宮陳列館編。吉林
集」（吉林省文化庁・
九・一八——東北淪
陷十四年史実展覧図片

中国が既存の写真を修正改竄して反日
宣伝用の写真に作り変えてきたことはよ
く知られており、これまでも慰安婦問題
や南京事件などでその実例がいくつか指



① 100部隊在進行人体細菌実験

『勿忘「九・一八」』より

美術出版社出版発行。一九九二年十二月
第一版、一九九八年四月第二次印刷）を
入手した。一五三頁から成る旧満洲を中
心とした反日写真集で、その中の「細菌
殺人工廠」と題する四頁がいわゆる満洲



② 虐殺セラレシ邦人

済南事件写真集より

第七三一部隊（関東軍防疫給水部本部）
と同第一〇〇部隊（関東軍軍馬防疫廠）
関係の写真三五点で、筆者が注目したの
はその中の「一〇〇部隊に於ける人体細
菌実験」と説明のついた一枚の写真（写
真①）。筆者は、これと酷似した写真を
見た記憶があつたので手許の資料を調べ
たところ、昭和三年（一九二八年）に発
生した済南事件の時に、蒋介石の率いる
支那国民革命軍部隊によつて虐殺された
日本人居留民の死体を済南医院で検死し
ている数枚の写真（写真②）④）を改竄
したものであることが判明した。両者の
間で異なっているのは手術台の上に置か
れた被検（験）者だけである。済南医院
の写真では火あぶりにされて性別さえ区



③ 虐殺セラレシ邦人（火アブリニセラレシ婦人）

別できない程に焼けただれた日本人の遺
体が置かれていたのが、「一〇〇部隊」
の写真では衣服を着けた男の写真に入れ
替っている。いかにもこれから生体実験
に付される人間のように見える。写真改
竄は中国のお家芸だが、この写真も実に
巧妙に偽造されており、済南医院での検
死写真を見たこともない一二億の中国人
の中に、これが改竄された写真だと思っ
て者一人もいないだろう。恐ろしいこと
である。

なお、筆者の手許にある済南事件の写
真は、事件で出兵した第六師団歩兵第四
十七連隊の軍人が所蔵していたアルバム
を、平成五年八月に家族から拝借し、全
頁をコピーしたものである。



④ 石ヲ腹ニ入レアリシモノ

岡村寧次将軍

石井(七三二)部隊を語る

関東軍参謀副長時代の回想

私は軍参謀副長という戦時職務に在りながら、別に駐満大使館附武官という平時職に転補されて居り、軍司令官も同様であるが、儀式のときなどは一々正装に着換えなければならず、面倒なことであった。しかし軍と大使館との間は極めて円満で毫も板挟みになることは無かった。大使館附武官として書き残すことも無きにしても非ずであるが、省略する。

私は最初の極多忙の時期に満洲赤痢に罹り、食うや食わずでも休務することもできず、後期少しは閑になろうとする時期には、参謀長が交代したため、やはり多忙を極めた。これがため相当健康を害したが、参謀本部の定員外に転じたため、約三ヶ月間、全く仕事が無く、天の与えた休務に没することができた。

石井機関については、私は創設時から終戦後、石井四郎氏の晩年にいたるまで熟知している関係にあるので、本機関の内容内容実態は、永久に発表すべからざるものと思うが、念のため附録として書き残しておくことにした。

◇

石井機関の創設については、本省では、大臣、次官、軍務局長、軍事課長、医務局長ぐらい、関東軍では小磯参謀長と私だけが知っているという極秘中の極秘事項とし、私だけが直接石井と密会して中央と連絡するということになっていたので、私が独り同機関の現況を知っていたのであった。しかし時日の経過に伴い、現地に秘密機関が現存しているため自然に、その所在を軍内の多くの者が知るようになっていった、その内容は熟知しないまでも。

超極秘であったため、私の日記にも一切これに関して書き留めてないので、記憶をたどって、その概要を述べることにする。

頭脳明晰な上に勇敢

石井四郎は千葉県の豪農の生れで、頭脳明晰の青年であったらしい。陸軍の委託学生として京都帝国大学に学んだが、

石井四郎夫人は当時の京大総長の令嬢であったことからみても、最優秀の学生であったことを証するに足る。

ときは昭和八年のある月のある日であったと思う。石井研究機関は、ハルビン東南方拉賓線の駅の近い背陰河に設置された。捕えた匪賊の収容所の隣である。機関長の石井軍医少佐には歩兵少佐の被服を着用させ、部下の軍医も階級相当の歩兵科被服を使用させ、下働きの大部分は、石井の郷村から選抜してきた青年で固め、一切の外出を禁止したので、石井はこれら青年に娯楽を与えるのに苦心していた。一ヶ月に一、二回石井は、新京の参謀副長官舎に来て必要の連絡を行った。私が差出した菓子、果物など一切手をつけず、その代りその全部を持ち去ったことを憶えている。

何分モルモットの代りに、どうせ去りゆくものとは云え本物の人命を使用するのであるから、効果の挙がるのは、当然と云えば当然であった。着々と医学的成果を挙げたがその内容は固より私はよく知らないが、終戦後石井の直接洩らしたところによれば、専売特許的成果件数は約二百種に上るといふ。

しかし、このように驚くべき成績を挙げた原因は、前述の本物試験資材の外、石井の頭脳明敏と熱意と勇氣に加えるに、これを補佐した部下軍医の献身的努力に因るものと思う。

当事者であった軍医大尉二名は、馬痘の実験其他のため殉職した。私は中央の

2000年こそ正す日本

聖徳太子の聖訓

公人、私あれば恨みあり、
故に、もの同わず、
公を妨ぐ。

人材と企業を結び
共生コンサルティング
実績34年

イムカ 株式会社
社長 茂原 繁典

〒100-0011 東京都千代田区内幸町1-3-3 内幸町ダイヤビル

カーリース

企業における
業務の合理化を推進します

株式会社 **新 東**

〒020-0021
盛岡市中央通二丁目8-5東日本中央通ビル2F
TEL 019-623-1108 FAX 019-623-2140

諒解を得て、架空の戦況を設けてこの兩名のため殊勲を申請したことを憶えている。

石井は、また極めて勇敢で、上司の許可を得て、屢々大戦闘に際し、歩兵の最前線まで進出して、戦死の有様などを撮影した。

進級のためでもあるが、石井もときどき他の普通の軍務にも従事させられた。

私が北支方面軍司令官時代にも、隸下第一軍の軍医部長として山西省に兼任した。このときも本務の傍らその使命とする特別研究を行い、かずかずの成果を挙げた。特に凍傷の治療には、C三十七度の湯に浸すのが最良の方法であるという結論を得た。これは本物の人体を使用して生かしたり、殺したり、再生させたりした貴重な実験に基づくものであった。

しかし、何の事実によるか知らないが、これを中央がなかなか採用しないので、私は北支軍限りにおいて、この方法を採用した。例えば討伐に行った歩兵小隊に凍傷患者が出た場合、取敢えず小隊全部の者の小便を集め、患者をこれに浴せしめて初療を完うすることができた。第二期に入り患部が相当崩れ変形した患者でも、この方法を気ながに採用すれば全治することができた。

資料入手にソ聯が執心

終戦後も石井は、多くの問題を残した。

終戦前というよりも、私が第二師団長

として昭和十二年春、ハルビンに着任したとき既に、石井機関はハルビン南郊に相当立派な建物によって存在していた。石井軍医中將は、軍医学校教官をも兼務していたので、ソ連がハルビンに迫り来るに先ち、研究資料のエキスを三個のカバンに容れて、飛行機に乗って帰京し、これを牛込戸山町の自宅に隠匿しておいた。

終戦後、ソ米両国間に、この細菌戦の権威者たる石井の研究資料に対する激しい争奪戦が起つたのである。満洲に縁故の深いソ聯が、既に石井機関の存在を知っていたのは不思議ではないと思うが、米軍もこれを重視していたのには、その諜報の優秀性を物語るものと思う。

終戦後のある時、占領軍司令部当局は、連絡官たる有末精三中將に対し、石井四郎軍医中將を連れて来いという。それは戦犯か、利用かと有末が質したところ、後者であるというので、有末は安心して石井を軍司令部に伴った。その後いろいろ折衝があり、石井に金子なども贈与されたこともあったが、結局、右の貴重な三箇のカバンは内容とも、悉く米本国に持ち去られた。その後米国は、押収した陸海軍の文書は大部返還してきたが、この三箇のカバンは遂に還らない。

ソ聯側の石井に対する研究資料獲得の運動も猛烈を極めた。ソ聯将校の石井訪問は、最初は規定に従い占領軍司令部の係官が立会ったが、その後は深夜係官ぬきで石井を訪問する。当時石井は、自宅

を以て旅館を経営していたので、来客を謝絶するわけにはゆかない。ソ聯将校は、脅したり哀願したり、資料の一部分でもよいと譲歩したり、あまり頻繁に来訪するので、石井は遂にノイローゼとなって郷里に移住したこともあった。

米は勿論、ソも最初は、石井を戦犯に指定しなかったが、石井から何等資料を得られないと判明するやソ聯は一般の戦犯裁判から大に遅れて、昭和二十三年秋頃であったが、山田関東軍司令官等、石井機関関係者を戦犯裁判に附したのであった。

わが医学界でも、伝染病研究所関係者を始め石井の研究を高く評価する者があり、既に結論は出ているのであるから、モルモットその他の動物で再試験して学界に公表すべしと石井を激励してくれる者もあり、石井は将来を楽んでいたが病死したのは惜しいことであった。

石井の直接部下であった者で、生活費を求めため、研究資料を小出しにしていた者もあると石井は申し立てた。血液の結晶などその例であるという。

註 なお、石井ばかりではない。私の関東軍参謀副長在任のとき、某国立大学の外科担当教授二、三名が来訪し、陸軍省の諒解の下匪賊処分するとき、刀を以て首を切ったときの断面を実視したく、またとない好機であるからなるべくば、その機会を与えてくれと、窃かに頼み込まれたので、吉林の部隊に紹介したことがあった。

5つのフィールドで「とっておきの、くらし」を築きます。

音	熱	木	水	技
防音 防振 吸音	省工ネ 断熱 床暖房	木材保存 緑化	水処理 防水	PM工法 情報機器 MJP機械 計画換気

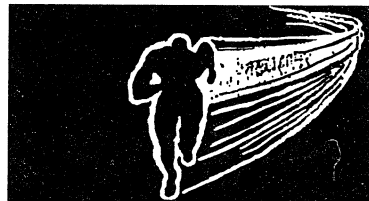
音・熱・木・水からシステムエンジニアリングまで



株式会社ピコイ
本社/〒950-0926 新潟市高志1-8-1 TEL025(287)1111(代)

21世紀ヘテイクオフ

TEIKeiが、
努力で守ります。



TEL 03-3207-8511

〒160-0022 東京都新宿区新宿
五一七七一七 渡菱ビル

行動と創造で躍進する
テイケイ株式会社

政治犯使って生体実験

近代史
拾い読み

ソ聯にもあつた細菌兵器製造工場

—すでに二十万人以上殺す—

細菌兵器の研究をしていたのは石井部隊に限らず、ソ聯、米、国、ドイツ、英国、中国等々全世界的な傾向だつた。就中、ソ聯が最も熱心だつたことは前号でも触れた。以下はB・フリーマントルによる旧ソ聯軍の細菌兵器の研究開発と使用についての報告である。

細菌兵器製造工場

一九七二年、米ソ両国は戦争に用いる微生物の開発、生産、貯蔵を禁止する細菌兵器条約に調印した。条約は七年に発効し、百十一カ国が加盟、批准した。

ところが、ソ連は世をあたごるのかのように条約を無視してきた。この相手をなめきつた態度は、国連や、西側に

配置した在外公館のまっとうであるべき外交機能を軽視する考え方と少しも変るところがない。それとバランスをとるかのようには、アメリカもまた、ソ連に劣らないあなどり方を見せているといつてよい。国防総省には、射程距離三千二百キロの巡航ミサイルに化学兵器の弾頭を装着する開発計画さえある。ユタ州の地上と地下には、ニクソン大統領がアメリカは細菌戦に反対すると宣言する前から生産されている、VXガスの大量のストックがある。

西ヨーロッパの各基地に配属された対地攻撃ジェット戦闘機F111に化学兵器弾頭付きのロケット弾を装着する計画もすすめられている。

しかもアメリカは二連体兵器、つまり化学生物を内蔵した別個の容器から成る砲弾やロケットを開発しつつある。二つの容器とも、別々に切り離せ

ば害はない。工場で砲弾がロケットに容器をとりつける場合も、二つではなく一つだけである。発射前に、二つの容器が装着される。砲弾がロケットが軌道を飛んでいる最中に、二つの容器をへだてた壁がこわれ、異なる液体が混合して、GBと呼ばれる致死性の毒ガスが発生するのだ。

ソ連には化学生物兵器研究所があり、その製造工場がキーロフ、スベルドロフスク、サラトフ、カルガ、ズダ、モスクワ、ノボシビルスク、カリーニンにある。合衆国下院のある証人の証言によると、北極海のフランクリヤ島でこれらの細菌を強制労働収容所の囚人に使う人体実験が行なわれたという。

化学生物兵器の諸施設は、ソ連国防軍参謀本部第七局の管理下におかれ、KGBやGRUの将兵によって警護されている。また国防省には化学兵器本部があつて、さまざまな実験が行なわれている。第七局の最高責任者はエイ・フィルム・イワノビッチ・スミルノフ上級大將だ。ワクチン開発の分野は保健省次官ブルガソフの管轄下におかれ、KGBと緊密な共同作業をすすめている。

西側の情報関係当局は、キーロフの工場で少なくとも百二十五人の微生物学者、疫病学者、動物学者、伝染病の専門家が働いているとみている。工場

は二列の強化コンクリート壁に囲まれ、最初のコンクリート壁のなかには科学研究所が設けられ、GRUが警備に当たっている。二番目のコンクリート壁のなかには、生産施設があつて、大量の伝染性バクテリアを貯蔵した大きなタンクが並ぶ倉庫もある。これら致死性の殺人細菌には、ペスト、野兎病、破傷風、炭疽、黄熱病などの細菌がふくまれる。その警備がKGBの任務なのである。

キーロフでは、昆虫学者が細菌を伝播させる媒体としての蚊を対象に実験を重ねている。ズダルでは旧修道院が秘密バクテリア研究施設に使われ、囚人の微生物学者がKGBの監督下で強制的に働かされている。ペストと野兎病など二つの実験が進行中である。

ソ連は必ず
細菌兵器使うだろう

一九八〇年三月、スベルドロフスクで爆発事故があつた。その原因はまだ西側の知るところとなっていないが、倉庫爆発は一つだけだったと信じられている。KGBの部隊や科学者が同地区に急派され、激痛を催すようなタイプのワクチンが地域住民に強制注射された。幸いにも、第一九号として知られる研究所の爆発は街の南側で起り、しかも風は南向きに吹いていたため、

有毒煙は風に乗って市街地から遠ざかったといわれる。

しかし風向は南風で、ワクチン注射などの予防措置が講ぜられながら、近くの煉瓦工場に働く労働者や風下の住民が炭疽病に固有の悪性な症状をみせて少なくとも千人は死亡したのである。

あのマルコフを殺したりシンとい、ニコライ・ホフロフをフランケンシュタインさながら怪物に変えたタリウムといい、KGBは猛毒の細菌にたえずさらに高い致死効果を持たせたがつているかのように見える。

炭疽病なら何もさらに高い致死効果を持たせる必要はないはずである。というのは、第二次大戦中、イギリスの科学者はスコットランドのグリニヤード島で炭疽の実験を行なったが、三十七年たった今日でも、グリニヤード島には有刺鉄線が張られ、上陸禁止になつているほどだからである。グリニヤード島の炭疽菌は、スベルドロフスク汚染事件にくらべて高性能爆弾と核弾頭ほどの違いがあるとはいえず、それでもなお、致死効果は少しも減じていないと考えられているのだ。『ペンコフスキー報告』によると、ソ連で処刑された西側の二重スパイ、オレグ・ペンコフスキー大佐はモスクワ近くの研究所で開発された無色、無臭、無味の毒ガスについて語っている。「オレグは

効果的で、毒性が高い」と述べ、露骨な意図から「アメリカン」と名づけられたという。ペンコフスキーによると、ソ連の全砲兵隊は化学生物爆弾を支給され、使用法の定期演習が行なわれている。使用するかどうかの決定権は方面軍司令官にゆだねられている。

「これは疑問の余地ない問題で、いざ開戦になったら、ソ連軍はかならずや化学兵器を使うだろう」

一〇、五二七人を殺害

一九八二年三月、合衆国政府は国連および議会に送った三十二ページにのぼる報告で、ソ連は一九七五年以来、三カ国に対して四百回の化学生物兵器による攻撃を仕掛け、一万人以上を殺したと主張している。三カ国とはラオス、カンボジア、アフガニスタンと報告書は特定する。

国務省の副長官ウォルター・ストーセルはモスクワ大使として在任中、ソ連の例の放射線攻撃を受けた人物である。「ソ連とその同盟国は目にあまるほど、それもくり返し国際法や条約を破っている。世界がこの侵犯行為を阻止できなかったら、こんごそれが他国領土や他国民に対してくり返された場合、それを阻止できるチャンスは少なくなるだろう」と語っている。

ソ連は即座にこの三十二ページの報

告書を、機密解除にしたCIA当局の評価にすぎないと決めつけ、「薄汚い真赤な嘘」だと一蹴したあと、強い語調で次のように反論した。「世界は、アメリカがインドシナを侵略した際にベトナム、ラオス、カンボジアにおびただしい化学生物兵器をばらまいた事実を忘れてはいない」。

CIAの報告書は、化学生物兵器の攻撃を受けたと称する存命者や治療に当たった医師、そのような攻撃が間違いない行なわれたと主張する亡命者らの証言に基づいたものである。

合衆国もやむなく認めているように、たとえばソ連製のマーク入り容器といった物的証拠を入手しているわけではない。が、物的証拠を欠いているにもかかわらず、ソ連は責任を「回避できない」と合衆国政府は主張するのである。

この報告書によると、ソ連が使用した化学生物兵器は神経ガス、刺戟剤、活動不能剤、猛毒菌類である。この猛毒菌類は、毒素の基本構造がトリコセセンと判明しており、生物学的には活発な直菌類で、猛烈な発汗と内臓疾患をうながす。一方、ベトナム戦争中に捕獲されたアメリカの軍用機は、化学生物兵器を投下するのに使われていたと報告書は認めている。

CIAの報告書は、ラオスで二百六十二回にのぼるソ連側の化学生物兵器

攻撃が行なわれ、六千五百四人が死亡したと具体的に数字を挙げている。生存者は「赤いガス」につつまれるか「黄色い雲」が天をおおったと証言している。カンボジアでは一九七八年から八一年にかけて百二十四回の攻撃が仕掛けられ、九百八十一人が死んだ。アフガニスタンでは七九年以来、反政府ゲリラのムジャヒディン軍に対して、四十七回のその種の攻撃がなされ、三千四十二人が殺されている。

訂正 第33号4面第2段15行目「非難」は「避難」、同12面「南京事件・対話と検証の旅」の広告で「承認」は「証人」、第34号3面第2段後から6行目「戒厳」は「威厳」の夫々ミスプリントでした。

行動と創造で躍進する

テイケイ株式会社

〒160-0022 東京都新宿区新宿
五—一七—一七 渡菱ビル

21世紀へテイクオフ
TEIKei が、
努力で守ります。



TEL 03-3207-8511

近代史 拾い読み

南京俘虜收容所実見記

梶浦逸外

(昭和十四年)

午後三時海軍の自動車で、第五特別陸戦隊指令部を慰問し中川壽雄少佐に挨拶した。途中把江門の外の俘虜收容所を見、熊崎中尉の御説明をうけた。

南京の俘虜收容所には現在約千名ほどある。彼等は捕はれの身となつたことを悲しむどころか、現在新しい希望に燃え、皇軍に協力して新支那建設の礎石となるのを光榮とするまでの自覚に達してゐる。

俘虜收容所には、一切自治制が布かれてゐる。総隊部のもとに十余の中隊が分れ、別に衛生隊も編制されてをり。理髪所もあれば、老酒や煙草を売る酒保もある。俘虜は交代で労役に従事し、十分の賃銀を貰つてゐる。賃銀の半額は彼等に貯金せしめて釈放の際の旅費に当て、半額は彼等の自由にしてゐるが、食料、煙草の類は日本軍が総て支給するので、全く金の必要はないわけである。

俘虜は午前七時に起床、日章旗と五色旗との掲揚を終つて九時朝食。夜九時消灯までに午前一回夜一回の日本語の学習時間が

ある。彼等が日本語の勉強に熱心なのは驚くばかりで、隊内においても総て日本語でなければ口を開かせないことに定めてゐるところもあるといふ。

管理係のわが兵隊さん達は、彼等を部下と思つて懇ろに遇し、彼等はまたわが兵隊さんを師父の如く尊敬してゐて、実に和やかなもので日本軍の温い友情に結ばれた彼等は脱走など夢にも考へぬとのことである。私達は陸戦隊司令部の直ぐ前の江岸で、これ等の俘虜が赤い細い襷を掛けて、兵隊さんの命に従つて甲斐々々しく労働してゐるのに出逢つた。

次いで海軍病院と陸軍病院(兵頭部隊)とを慰問した。陸軍病院で、過日上海深谷部隊長からこちらへ転任せられた深谷中佐に会つてうれしく思つた。病院は元支那の中央大学を利用したもので、患者は〇〇〇名であつた。大講堂の前には「親愛精誠」と大書した額が掲つてゐた。慰問団の来た時には、こが余興場となるので、過日の京滋慰問団もこ、で余興を演じたとのことであつた。慰問後深谷中佐の御案内で、露台に登つて、南京の展望をしつ、説明をうけた。

次に支那陸軍の核心を為す中央軍官学校に案内して貰つた。革命当時、蒋介石は広東の黄埔に「軍官学校」を建設した。これは丁度我國の陸軍士官学校に相当するもので、その第一期及び第二期生を、蒋介石は己れの思ふまゝに訓練して、その出来上つたものを率ゐて、往年の北伐に向つたとのことである。北伐戦に於ては、本校出身の将校が各所に転戦して、その大部分は戦死若しくは戦傷して、北伐の終つた時には、

僅か数十名となつたほどで、かなり勇名を轟かしたものである。従つて生き残つた者は、拔擢又拔擢で、三十歳代の若い師団長や軍司令官や軍参謀長などが出来たりした。それで現在でも黄埔の軍官学校出は、大いに巾を利かしてをり、蒋介石の片腕となつて、何れも重要な地位を占めてゐるさうである。

その後、軍官学校はこの南京に移つて陸軍中央軍官学校の名に改まつた。その所在地は南京城内の明の古宮のあつた附近で、北に富貴山を負ひ、南は明の古宮飛行場に面してゐる。学校の内部は予科と本科に分れ、予科は正門を入つて右方にあり、本科は門内正面の建物で、校庭の中央には、日本の梅屋氏の寄贈にかゝる孫文の銅像が建つてゐる。

校長は蒋介石でその卒業生が蒋介石直系の中央軍将校として、蔣政権の拡大強化の御用を勤めるものであるのは謂ふ迄もない。卒業生に最初の間は、蒋介石名人入りの短剣を贈つたものだと言はれる。職員中の主なるものは日本の陸軍士官学校出身者が多く、学生生活はなかなか几帳面な組織になつてゐる、これらの事柄を見聞するにつけても、現在内地の一般国民が支那に対する認識不足を痛感すると共に、まだまだ日本も本気になつて人物養成の機関に力を入れねばならぬと思つた。

校内に在る蒋介石の住居を見物して後、紫金山の天文台、天臨閣の氣象台、鼓楼等を見学して帰館した。私は此処でも支那が現代文化に後れてゐるとのみ思つてゐた誤れる認識を是正せざるを得なかつた。

(二面より続く)
自分が想像していた一人や二人ではなかつた。まだ、五百名を超える兵士がこのジャングルに生き残つてゐた。中には、アギガン岬で、戦車に乗つて突入したはずの少佐参謀も生き残つてゐることを知らされた。私は、その参謀のところへ駆け寄つた。

「よく生きていた。これだから力のためしどころだ。頑張ろう……」
とやせ衰え、骨と皮になつた固い手で握手を求めてきた。

「頑張りませ。最後の一兵まで！」

思わず参謀の手を握りしめた。我々は、もはや敗北したことを自覚してゐた。しかし、戦友の血と肉で染め抜いた島の悲劇を、なんとしてもムダにはしたくなかつた。あのタツポーチヨ山にひるがえる星条旗を引きずりおろし、日章旗をかかげなければ……と、強い復讐の念に燃えていた。

一路、目標をタツポーチヨ山頂に向け、数人ずつに分れ、ゲリラ戦で進むことになつた。

海辺から吹きあげる風に、戦友の土と化していく臭いが、訪れては遠く祖国の空へと飛んでいく。ゲリラ戦がいつまで続くか、果たして成功するか、すべて大君に捧げた生命が、どう展開していくか、いま洞窟の外に立ち、はるか故郷を望みつつ口ずさむ歌に、涙がとめどなく流れだした。

海行かば水つく屍
山行かば草むす屍
大君の辺にこそ死なぬ
かえりみはせし

日本軍になついた支那住民

——日本軍と共に撤退した人々——

元第十一軍司令官・陸軍中將
笠原 幸雄

日本軍による中国人虐殺が神話化しはじめている。なる程、一部には質の悪い兵隊もいたであろうし、虐殺もあったであろう。だが、大部分の日本軍は無辜の支那住民の愛護に意を用いた筈だ。そうでなければ、皇軍と支那住民との、こんなに心暖まる話がどうしてあり得ようか……。特殊な例で日本軍一般を非難することの危険を改めて思い起こしたい。

私が着任したのは昭和二十年四月だった。

その時の第十一軍は、第十三師団、第三師団、第三十四師団、第五十八師団、第二十旅団、第二十二旅団だった。が、私が着任した直後に、第十三師団、第三師団、第三十四師団が引きぬかれて広西省から漢口へ撤退を命ぜられた。私はほとんど撤退作戦をやるために着任したようなものだった。

これは太平洋戦争中のどの戦域での苦勞とも、くらべものにならないほど楽な作戦だった。

支那にいた軍としては、いかなる作戦をさすけられても、その任務が遂行できるかできないかという心配はなかった。ただ問題は、損害をいかに少なくして作戦任務を達成するかが、軍司令官以下各指揮官が一番頭をひねったことだった。

私のところは、柳州を軍司令部にしてちょうど右の方は貴州省で湯恩伯軍の監視をし、左の方は南寧のほうに目を出してビルマとの交通路を扼していた。ところが撤退作戦で両方が同時にパッと退つてくれれば損害を出さずに撤退できたのだ

とか、師団の撤退の順序とか、いろいろの関係でまず左の第三師団方面を下げて、つぎに第十三師団を下げなければならぬ。敵が一番近い十三師団の撤退が一番困難な状態にあった。

第十三師団の一番先頭

が服部卓四郎大佐の六十五連隊だった。心配したが、服部大佐の卓越した指揮と、会津若松の連隊だから、最も日本のうちで伝統といい、郷土の関係からいっても、精鋭中の精鋭であったので、損害が割合に少なく撤退をすることができた。

昼はいつも敵の飛行機がいるので、夜撤退したのである。私自身、また幕僚なども撤退作戦にともなう、いろいろな戦況の状況を見たが、まったく郷土の特性を特によく現出していた。

夜間だから、われわれ指揮官がそばにいないことを知らずに休憩している彼らが、雑談しているのをきいても、少しもいままでの戦争の時の苦心を誇るというようなところがない。また食事也非常に粗末なものを食っている。それでも少しも不平をいわず、当りまえだというような顔をしている。私はなるほど東北地方の軍隊はこういう特性をもっているのだなと感心した。

もう一つ最後にいいたいのは日本軍の

虐殺とが住民との関係についてである。われわれの軍において撤退作戦中、日本軍が下つて来るとき、日本軍について沢山の支那住民が一緒に下つて来た。これは湖南省の住民が非常に日本軍になつて来たという証拠ではないだろうか。結論において日本軍と親密な状況にあったということを示しているように私は思う。

また住民も私が戦争中に見ていると実に美しい状態にあり、一緒に下つてくる女がなげなしの食事を子供や老人にわけ与えていた。こういう美しい情景を見て、私はほんとうに感動させられた。こんなこともあった。

これは日本軍がいかに支那住民との関係がうまくいっていたかを証明する一つの例になると思う。われわれの部隊が九江に集結した。ところが、揚子江を上下する英米の船が九江に寄る。あるときイギリスの兵がアメリカの兵か、どっちかはつきりは忘れたが、軍艦が来て水兵が上陸をして町を散歩していた。そこへわれわれの兵が通りかかった。ところが何かの拍子でそれらの水兵が日本兵を捕えて非常にいじめた。そうしたら、見ておつた九江住民たちが人垣をつくつて外国水兵と日本兵の間に割り込んで、外国水兵が日本兵に乱暴ができないように人垣をつくつてくれて、帰りなさいと助けて帰してくれた。

当時、すでに日本軍は武装も解除されている。もしも支那人が日本軍をうらんで、コンチクショウということであれば、外国の水兵が日本兵をいじめるところを

酵母生き生き、刺身の鮮度



銀河高原ビール

銀河高原ビール株式会社
〒104-0061 東京都中央区銀座2-8-12
チャンドラー・ポースビル3階 TEL03-3564-0018



檜の四寸、 本建築の住まい。

本物を志向し、本建築に立ち戻った檜の家。
日本が誇る、日本の住まいです。

東日本ハウス

東日本ハウス株式会社
本社/〒020-0062 盛岡市長田町2-20 ☎019(624)3261(代)

見れば、散けたらといって手をたたくて、ぶのが当然の話だろう。中にはあるいは悪いことをやったものもあるかも知れないが、大部分の日本軍は悪虐無道なことをやったのではないというこの証拠であらう。
(昭和46年記)